

ヨハネの手紙第一2章18節—3章3節 「終わりの日に現れる者」

1A 惑わす者たちの現れ 18-27

1B 多くの反キリスト 18-23

1C 出て行った仲間 18-19

2C みなが知っている真理 20-21

3C 御子の否定 22-23

2B 御子への留まり 24-27

1C 初めから聞いていること 24-25

2C 注ぎの油による教え 26-27

2A キリストの現れ 2:28-3:3

1B 御前で恥じない生き方 28-29

2B キリストに似た者 1-3

本文

第一ヨハネ 2 章を開いてください、私たちの学びは 18 節から始まります。ヨハネは、「終わりの日」について話し始めます。終わりの日とは、主がご自分の被造物に対する計画を完成される時です。その時に、二人の人物が現れます。一人は、反キリストです。もう一人は、キリストご自身です。救い主が現れる前に、偽物の救い主が現れます。惑わす者がやって来るのです。世の始まりの時に、人を惑わして、罪を犯すようにさせて、神から引き離れた悪魔は、終わりの日にも、何とかしてキリストから人々を引き離すために、最後のあがきをします。ヨハネは、キリストが初めに来られてから、もうすでに終わりの日にいることを教えていて、私たちが終わりの日にどのように生きるべきかを、丁寧に教えてくれています。

1A 惑わす者たちの現れ 18-27

1B 多くの反キリスト 18-23

1C 出て行った仲間 18-19

¹⁸ 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今が終わりの時であると分かります。

「幼子たち」という、呼びかけから始めています。なぜなら、惑わす者たちが、知識をかざして、「あなたがたは真理について、知らないのだ。私たちはその真理を持っている。」という態度で迫られるからです。グノーシス主義の異端が、知識が、自分たちが与えられて神に近く、あなたがたはその知識がないとして仲間から離れているからです。幼子は、たとえ知識に疎くとも、父を知っています。ヨハネは 2 章 14 節で、「幼子たち。私^があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが御

父を知るようになったからです。」と言いました。

悪霊を主の御名によって追い出して、喜んで帰ってきた弟子たちについて、イエス様が父なる神に賛美しました。「ルカ 10:21 天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。」幼子たちだからこそ、父を知っているがゆえに、示されている真理があるのです。イエスは、良い羊飼いの喩えでも、声を見分ける耳を羊は持っていることを話しています。「ヨハ 10:4-5 羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。しかし、ほかの人には決してついて行かず、逃げて行きます。ほかの人たちの声は知らないからです。」牧者を信頼している、というところに、声を聞き分ける知識があるのです。

ここで二つの「反キリスト」が出て来ています。一つは、彼らが聞いていたとおりの「反キリスト」です。けれども、もう一つが、「多くの反キリスト」が現れていると言っています。初めのほうは、英語で言うならば、「the Antichrist」と、「ザ」が付いています。後ろのほうは付いていません。これは、前に出てくるのは、聖書で預言されている反キリストのことです。イエス様が、オリーブ山で、ダニエルが預言したとおり、聖なる所に荒らす忌まわしい者が立つことを語られましたが、それが反キリストです。パウロは、「不法の人」と、テサロニケ第二 2 章で語っています。そしてヨハネは黙示録で、「獣」とダニエルの預言を引用して話して、キリストの御国に対抗する、獣の国を悪魔の力を借りて造ります。

反キリストは現れるのです。けれども、今は、「多くの反キリストが現れています」と言っています。この手紙を読み進めると、彼らは、聖書で預言されているような政治的指導者ではなく、御子を否定する偽の教えを奉じている者たちのことです。終わりの日の反キリストはまだ表れていませんが、反キリストの霊は働いているのです。4章3節で、「イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。」と言っています。反キリストは、人として現れますが、その霊は働いています。パウロはこれを、「不法の秘密」と第二テサロニケ 2 章で呼びました。

それが、多くの反キリストが現れていると言っている所以です。御子を否定することが、反キリストの大きなしわざです。それをすでに、教会の中で教えとして偽教師たちが広めています。そして、自分たちがそこから出ていくということをしていたのです。

¹⁹ 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためだったのです。

こうした者たちは、使徒たちの教えを堅く守る教会の仲間から出ていきました。使徒たちの教えとは、イエスこそが神の御子、神ご自身であり、肉体を取られた。そしてこの方に永遠のいのちがある、というものです。それを受け入れていないので、出ていきました。ヨハネが、兄弟を憎む者は闇の中にいると、2章前半で言っていました。こうした人物たちのことです。

このような人たちは、初めは仲間のようにいて、そうでないことが明らかにされました。これは、キリスト教会で現実に行っていることは、使徒たちがまだ生きている時もそうだったということが、彼らの手紙を読んでいくとよくわかります。そして主ご自身の弟子たちに、そうした者がいたの思い出してください。イスカリオテのユダです。彼は、最後の最後まで弟子たちに疑われることはありませんでした。主が、裏切る者たちがいることを最後の晩餐で明かされた時に、自分たちのことかと不安になりました。イスカリオテのユダだと分からなかったのです。

そのイスカリオテのユダが、晩餐の席から外れて、ようやく最後の晩餐を終えることができ、そして、互いに愛しなさいという命令を出されたのです。イスカリオテのユダは、キリストのからだに裂かれて、流された血にあずかる交わりには、いることができなかつたのです。それから、互いに愛する命令も守れなかつたのです。なぜなら、イエスが彼を愛されたということを知らなかつたからです。聖なる交わり、御子に留まる場所には、そうでない者は出ていかざるをえないのです。その光に居ることは、耐えられないのです。闇の中に居るのです。

さらに読んでいけば、ヨハネは、ただ御子にとどまっていなさいと勧めます。これは、みなさんにもお願いすることです。御子に留まっていましょう。そうすれば、いかにもキリスト者らしくして、また、知識をふりかざしている人がいても、仲間であれば、兄弟への愛を持っていないので、出ていくのです。自分の高ぶりが、聖なる方の油注ぎを受けている信者たちにある聖さに耐えられないので、出ていくのです。まことの交わりは、御子にある交わりで、御子は肉体を取られ、そこに永遠のいのちがあります。私たちが集まる所で、この方がおられます。なので、単なる知識だけで、交わりにあるいのちにあずかっていない人は、出ていかざるを得なくなります。

2C みな知っている真理 20-21

²⁰ あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。

ヨハネは、グノーシス主義の異端が「一部の者たちにしか知られていない知識」に対抗して、「みな真理を知っています」と断言しています。御子の知識にあって、私たちは交わりがあり、一つにされています。すべての人に真理が知らされているからこそある、尊い交わりなのです。

そして、「聖なる方からの注ぎの油」と言っていますね。午前礼拝の説教でお話しましたが、旧約聖書には、油注ぎが祭司に対して、また王に対して行われています。そうすることで、自分も性

別されて、主に仕えることができます。油は、聖霊を示しています。信じる者たちすべてに与えられている、聖なる御霊の働きです。「I コリ 6:11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

そして、御霊がおられるからこそ、真理を悟ることができているのです。御霊は真理の御霊だと、主は言われます。「ヨハ 16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。」教会は、聖霊によって真理を知る、とても神秘的な共同体です。

²¹ 私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。また、偽りはすべて、真理から出ていないからです。

ヨハネが、このように教えていると、何か彼らが真理が知らないから、新たに教えないといけないと、読んでいる人は思ってしまうですね。幼子と呼ばれているのですから、なおさらのことです。しかし、そうではないのです。真逆です。知っているからこそ、語っているのです。

真理は、すでに油注ぎによって、しかも聖なる方の油注ぎによって与えられています。すでに知っている事柄について、その確認をし、確信が強まっていくために、ヨハネは語っているのです。何かあなたは持っていない、だから今、新たに持たなければいけないとして圧力をかける手法に、乗らないでください。御子のうちにいれば、すでに真理を知っています。聖なる方からの油注ぎがあるのです。劣等感を抱かせたり、不安にさせたりする惑わしに注意してください。

3C 御子の否定 22-23

²² 偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否定する者、それが反キリストです。²³ だれでも御子を否定する者は御父を持たず、御子を告白する者は御父も持っているのです。

使徒たちの証言は、イエスが神の御子、キリストであるということです。イエスが、ピリピ・カイサリアで、ご自身をだれだと言うか？と問われた時に、ペテロが答えましたね。「あなたは生ける神の子です。(マタイ 16:16)」このことを否定する者は、みな偽り者だということです。

ここで大事なものは、「反キリスト」の意味は、キリストに反対するというのではなく、キリストに代わってという意味だ、とうことです。キリストの代替なのだということです。まことの神、キリストにすり替えて、違うものを信じさせるのが反キリストです。ですから、イエスがキリストだ、イエスが神の

子だと、口では言っている、実質、違うものを信じさせているのであれば、それも御子を否定していると言えるでしょう。ですから、エホバの証人であるとか、モルモン教であるとか、口では同じ告白をしますが、実際は、エホバの証人であれば、イエスが造られたものであり、最高級の天使なのだという説明をします。実質、イエスを否定していることになるのです。

そして、御子を否定したら、御父を持っていないと断言していますね。神を信じると、多くの人があります。しかし、イエスを自分の救い主、キリストであると信じ、受け入れ、この方が神の御子、すなわち神ご自身であると告白するところに、大きなハードルがあるのです。しかし、そのことを告白するからこそ、私たちは御霊によって新しく生まれていることを確認できるのです。

御子を否定しているのに、神を信じているというのは偽りです。御子を否定すれば、御父を否定しています。御子を告白していれば、子と父は一つですから、御父も持っているのです。この告白には、御子が神ご自身と一つだということを信じていることを示しています。パウロが、終わりの日に全ての人が、イエスを主とあがめることを話した時に、こう言いました。「ピリ 2:11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」イエスを主とすると、父に栄光が帰されます。御子があがめられると、御父がそのままあがめられます。父と子は、そのように一つなのです。この神秘的な、御子と御父の交わりに私たちは入れられています。

2B 御子への留まり 24-27

1C 初めから聞いていること 24-25

²⁴ あなたがたは、初めから聞いていることを自分のうちにとどませなさい。もし初めから聞いていることがとどまっているなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまります。

そうです、「とどまる」というのが、使徒たちが私たちに強く勧め、命じていることです。これから新たに知識を得るのではなく、すでに持っている真理に根差すのです。ヨハネは、すでに「初めから聞いていること」について、話しています。「1:1-2 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」

他の使徒たちも、同じように進めていました。コロサイの教会に対してパウロは、「2:7 キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」と言いました。同胞のユダヤ人から迫害を受けて、ユダヤ教に埋没しようとしていた信者たちに、励ました、ヘブル書の著者は、「初めの確信を保つこと」を話しました。「3:13-14 「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、で

す。」ペテロは、第二の手紙で、すでに知っていることとはいえ、敢えて思い起こすために書いてい
ると言っていました。「1:12 ですから、あなたがたがこれらのことをすでに知り、与えられた真理に
堅く立っているとはいえ、私はあなたがたに、それをいつも思い起こさせるつもりです。」

²⁵ これこそ、御子が私たちに約束してくださったもの、永遠のいのちです。

ヨハネは繰り返していますね、永遠のいのちとは、御子と御父が一つであるという中にある、交
わりです。以前もお話しましたが、永遠のいのちは長さのことを言っているではありません。い
のちとは、結びつきがあるからこそ存在し、その結びつきとは、いのちの源である神が、御子と一
体になっておられるところに存在します。

2C 注ぎの油による教え 26-27

²⁶ 私はあなたがたを惑わす者たちについて、以上のことを書いてきました。²⁷ しかし、あなたがた
のうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありま
せん。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りで
はありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。

多くの反キリストについて、改めて「惑わす者たち」と言っています。しかし、あなたがたはすでに
教えられているところにとどまればよいのだと、励まし、慰めています。それは、御子のうちにとど
まることです。

再び、ヨハネは、注ぎの油、すなわち御子が遣わしてくださった聖霊について繰り返しています。
聖霊のお働きが、これほど大事であることを私たちは知る必要がありますね。分かり易く言うと、こ
れが、教会がカルトから守られる秘訣です。聖霊のお働きこそが、健全な主への従順と、人への
盲目的な服従の違いです。主の權威に従うことと、カルトの違いの決定的な違いです。

私たちのまことの教師は、聖霊ご自身です。この方が心に、神の律法を置いてくださっています。
それで、自分の肉の力ではなく、信仰によって神の命令を守る力と知恵をくださるのです。教師は、
あくまでも、教える賜物を神の恵みによって与えられていて、教える賜物も、御霊によるもので
す。ですから、教えることも、教えを聞くことも、すべて御霊のわざです。この方が大活躍される
ところで、私たちは主の前にひれ伏し、その方の愛に浴し、この方にすべてを明け渡して、従順に
なることができます。

2A キリストの現れ 2:28-3:3

そして、ヨハネは、少し新しい話題に入ります。先に、「今は終わりの時です(2:18)」と言ってい
ましたが、偽のキリストの後に、まことのキリストが現れます。その現れを私たちキリスト者がどのよ

うにお迎えすればよいのかについて、教えます。

1B 御前で恥じない生き方 28-29

²⁸ さあ、子どもたち、キリストのうちにとどまりなさい。そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ、来臨のときに御前で恥じることはありません。

まず、「子どもたち」と呼び掛けています。これは、3章1節で、私たちが神の子どもと呼ばれるようになったことを話すためだと考えられます。長老ヨハネにとって、信仰にある子どもたちであると同時に、自分自身も含めて、神によって、御霊によって生まれた子どもたちです。

子どもたちは、「キリストのうちにとどまりなさい」と勧めています。先には、「御子のうちにとどまりなさい」と勧めていましたが、御子というのは、神の独り子であり、神と一つになっておられることが強調されています。キリストというのは、元々の意味が「油注がれた者」です。ヘブル語のメシアのギリシア語がキリストです。これは、神に選ばれた人物で、罪を赦し、人々を神のもとに引き寄せ、救う使命を持っています。そして、すべてを支配する王とされます。

この方のうちにとどまりなさい、と勧めています。「とどまる」という言葉をヨハネは好んで使いますが、主ご自身が多く使われました。信じたユダヤ人たちに対して、「ヨハ 8:31 あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。」と言われました。ただ、知的に信じるのではなく、とどまる、つまり、共にいることです。これは「宿泊する」とも訳されており、ただ通りすがりに出会うのではなく、引き止めていっしょに一晩過ごすというような意味合いがあります。ですから、イエスのことばを聞いて同意するだけでなく、そのままとどまらせるのです。すでに弟子になっている者たちには、「ヨハ 15:4 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」

そして、「キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ」とあります。これは、私たちの良心がきよく保たれていて、何のためらいもなく、大胆にお会いできるという意味合いになります。「確信」のギリシア語「パレーシア παραρησία」は、「言論の自由」を表していました。どんな考えに基づき発言し、表現しても、社会的な制裁や、国家権力による弾圧を恐れることなく、自由に語れるという意味です。「妨げられることなく」とか、「大胆」という意味合いで使われています。同じ考えで、パウロも、主が来られる時の願いと祈りを、次のように言い表しています。「1テサ 5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。」ここの「責められるところのない」というところです。

だから、「来臨のときに御前で恥じることはありません」と言っています。主が今、来られたら、この方は自分の主人ですから、今、やっていることが恥だと思わなくなりますが、ということです。イエス様の、賢いしもべと、悪いしもべの喩えで、主人が戻ってきた時に、きちんと食事を与え、忠実に仕事をしていたら、主人から全財産を任せられるけれども、酒を飲んで、仲間のしもべたちを叩いているならば、厳しく罰せられることを話されました(マタイ 23:45-51)。主が来られることを待ち望むことは、私たちがキリストに留まり、いつ戻ってこられても恥ずかしくない歩みをしている原動力となります。

²⁹ あなたがたは、神が正しい方であると知っているなら、義を行う者もみな神から生まれたことが分かるはずです。

神の子どもとして、神に倣う者になっていることをヨハネは教えています。神は正しい方であるならば、神から生まれている者も義を行っています。ヨハネは敢えて、逆の言い回しで、「義を行う者もみな神から生まれたことが分かるはず」と言っています。これは、実が結ばれていることを強調しているのです。義を行っているという実が、必ず神から生まれた者であれば結ばれているはずで、神から生まれていると言いながら、義の実が結ばれていないというのは偽りだということを、教えているのです。これは次回、3章4節以降で、さらに詳しくヨハネが教えます。

2B キリストに似た者 1-3

それで3章です。章や節は、あくまでも何世紀も後に、ある人が聖書の引照がしやすいように、便宜上、つけたものです。そのまま話をヨハネは続けています。

¹ 私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。事実、私たちは神の子どもです。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。

ヨハネは、どれだけ神が私たちを愛されたかについては、4章7節以降で詳しく話していきます。9-10節を読んでみます。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」神は、御子を、私たちの罪のための宥めのささげ物とってくださいました。前の文で見たように神は正しい方ですから、私たちの罪に対して裁かないといけません。しかし、ご自分のひとり子をその宥めのささげ物とされたのです。ここに愛があります。「考えなさい」と言っているので、よく考える必要がありますね。

そして、「事実、私たちは神の子どもです。」と言っています。ここには、神のご栄光とその性質にあずかっていること。また、神を父として親しみをもって呼べることの二つの意味合いがあります。

私たちは、神の子どもとして、神のものを相続しています。そして、神の子どもとして、この方を、「アバ、父」と呼ぶことができます。「ロマ 8:15-17 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。16 御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証してください。17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

このことを主は、復活の後に明らかにされました。ご自身が神の御子であります、ご自身において神は信じる者たちを養子縁組にしてくださいました。それで、ご自身が信者たちの長子、長男となってくださって、この方に連なる者としてくださったのです。よみがえられた後に、マグダラのマリアにこう言われました。「ヨハ 20:17b わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」主が、神の子どもになった弟子たちを、自分の父でもあるがあなたがたの父でもあることを伝えなさい、とされています。

そして、「世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。」とされています。私たちについて、神を知らない人たちは、本当に理解できません。「I コリ 2:15 御霊を受けている人はすべてのことを判断しますが、その人自身はだれによっても判断されません。」御父と子どもとされた関係を見ても、外から見たらわからないですね。御霊によって初めて判断できるのであって、理解できません。

² 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。

ヨハネは、今も神の子どもになっているのですよ、と、愛情を込めて話しています。けれども、神の子どもが目に見える形で現れるのは、将来です。今は、神によって生まれて、霊的に神の子どもだけれども、目に見える形で栄光の姿を持って現れるのは、将来を待ちます。私たちが、キリストと共に地上に現れる時、私たちも付いていくのですが、その時は栄光をもって現れます。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」

私たちが栄光の姿に変えられるのは、主が私たちのために戻ってこられる時です、携挙の時です。「ピリ 3:21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」それが、ヨハネが「キリストに似た者」となるというのが、ここで言っている「栄光に変えられる」ことです。

私たちに対する神のみこころ、私たちを救われたことの神のみこころは、キリストにあってご自分のかたちに回復されることです。ご自身に似せて造られたのが人ですから、それを目的にしているのです。「Ⅱコリ 3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

そして、このことの完成は、キリストをそのまま見る時だとヨハネは言います。それは、パウロも話していることで、顔と顔を合わせる時が来ると言っています。「Ⅰコリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」今は、御霊によって変えられていますが、完成は主に直接、お会いする時です。

³キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。

キリストをありのままに見て、その時にキリストに似た者になるのですが、そこに望みを置いているということは、今の自分の歩みに関わります。この望みを抱いていたら、自分が今、汚れの中にいることは、やばいと思うはずですが、主にお目にかかって、自分が主のように変えられるのですから、今の自分も、そのことに驚かないように、聖めを求めるのです。それが、ここでヨハネが言っている、「キリストが清い方であるように、自分を清くします」ということです。

キリストが現れるということは、日々の私たちに直接、関わります。私たちは祈りに入れたらいいですね、「主よ、今日、もしかしたら戻ってこられるかもしれません。楽しみにして、いきっていきます。」というのは、どうでしょうか？王なる主が来られるのです、私たちが自分自身を整えているという姿勢です。

ですから、反キリストの現れについては、今もその霊が働いているので、惑わしに注意すること。けれども、知識に圧倒される必要はなく、もうすでに油注ぎで真理を知っているということ。そして、まことのキリストの現れについては、私たちはこの方に望みをおいて、この方に留まって、自分を清めるということなのです。